

同朋会員の方からこんな質問をいただきました。

四月同朋会より

私たちが地域社会の中で生活するにおいて、家に神棚があったり神社のお祭りやクリスマスなど他宗派他宗教の行事や振舞いなどと無縁で生活したりすることはできません。そういう時、真宗門徒としてどのような心持ちでそのことに向かったらいいのでしょうか。

いろいろな寺院の総代さんにアンケートを取ったところ「古く慣習としてやってきたことを真宗の教えに沿わないからやらなくていい、と言われるのは少し寂しい気がする」というご意見がありました。例えば、「四日仏」は四日（イコール）死を連想するから良くないと言われるが気にすることはない、とか「清めの塩」には死は穢れでないから清める必要はない、と真宗では言います。これら慣習として行われていることについては、大切に守っていかねばいけない部分と、起源をたどると言葉遊びであったり当時の流行を取り入れていたりと必ずしもとらわれる必要のない部分とがあることが分かります。

地域社会で生きていくということは私一人の問題ではなく、周りに合わせるということがどうしても必要で、例えばマスク一つとっても無碍（むげ）にはできませんし、ましてや他の宗教を軽んじる必要もありません。

そういう場面に出会ったときは、思考を止めてしまっって右往左往するのではなく「どこに自分の大事なものを置いておくか」を考え選ぶことが大切なのではないでしょうか。神社で神様にお祈りをしたとき、（ああ、私はこういうことを願っているのだなあ）と考える。そういう私だと自分に目を向けていく視点が大切だと仏教では教えられます。不幸だと感じることをやってきたとき、そこからどうやって抜け出したらいいか。自分の外側に原因を見出す在り方を外道（げどう）と言います。自分の外側に原因を見出す在り方を外道（げどう）と言います。外道に対する言葉は内道（ないどう））。自分を見つめるといいう在り方です。出来事に対して不幸だと感じているのは私自身である、と気づいていく在り方。その在り方を仏教では説いているのです。

今月のことば

悲しみある
怒りある
怒りは
人と繋がれる
悲しみは
諦めを生まない

お寺の掲示板の言葉から。
私たちが怒りや悲しみを感じる時、そこには痛みがあります。痛みから生まれる悲しみを通して人とつながり、怒りを力に変えてあきらめない歩みをすすめるのだと思います。

五月同朋会

五月十四日(第二土曜日)

十三時から十五時

徳泉寺本堂

勤行

前任職・住職 法話

どなたでもご参加できます。
真宗の教えに触れてみませんか。

『徳泉寺報』後記

遠い国の戦場で起こっている惨状がリアルタイムで報道されてきます。人間の尊厳を奪う者は自ら自身の人間としての尊厳も奪っているのだと胸が塞がれます。『仏法広まれ世の中安穏なれ』と願わずにはられません